

【オペなしで！ 戸籍上も「俺」になりたい裁判 申立人鈴木げんさん陳述書（call4 公開版）】

※call4（<https://www.call4.jp/info.php?type=items&id=I0000075>）公開用に適宜省略・修正をしています。

※再頒布はご遠慮下さい。リンクは自由にお貼りください。

陳 述 書

静岡家庭裁判所浜松支部 御中

2021年10月4日

住所 静岡県浜松市

氏名 鈴木げん

第 1 はじめに

僕は、1974（昭和49）年に静岡県浜松市で生まれ、現在46歳です。2004（平成16）年、29歳で竹細工の職人として修行を始め、独立後は「竹の鞆GEN」という商号で竹鞆職人として竹細工の鞆を作成販売しています。現在は浜松市■■■区■■■町の竹が多い山間部で暮らしながら竹鞆を製作しています。家族はフリーライターとして働く女性のパートナーで、男女のカップルとして暮らしています（それぞれの仕事場に距離があるため、日常的に同じ家で暮らしているわけではありませんが、休みの日には週に1、2度僕の自宅で共に過ごしています）。

幼少期から自分の性別が「女」として扱われることに違和感を抱き続けていました。2013（平成25）年から「トランスジェンダー」「性同一性障害」という自分の性のあり方について向き合い「自分もそうなのではないか」と気づきました。2015（平成27）年、40歳で性同一性障害の診断を受け、男性ホルモンを投与する治療を開始し、その後、乳腺摘出の手術を受けました。今の僕の性別のありようを説明

【オペなしで！ 戸籍上も「俺」になりたい裁判 申立人鈴木げんさん陳述書（call4 公開版）】

※call4 (<https://www.call4.jp/info.php?type=items&id=I0000075>) 公開用に適宜省略・修正をしています。

※再頒布はご遠慮下さい。リンクは自由にお貼りください。

する図を代理人弁護士が記者会見用に作成したので、添付します（添付①）。

2016（平成28）年、浜松市近郊に住む友人らと「浜松TG研究会」（「TG」とはトランスジェンダーの略です）を立ち上げ、僕は代表を務めています。多様な性を生きる人はもちろん、みんなにとって生きやすい社会になるように、草の根的な活動をしてきました。特に力を入れてきたのは浜松市立中学の制服問題です。性自認の関係などの違和感をもたずに、全ての子ども達が着られる制服の選択肢を増やすことは、トランスジェンダーだけでなくみんなにとって必要なことだと思っています。

浜松市パートナーシップ宣誓制度にも関わり、市と一緒に内容を考えました。その取り組みが実り、2020（令和2）年4月1日、僕が45歳の時に制度の施行に至りました。施行初日にパートナーと2人で制度を利用し宣誓をし、浜松市で第一号となりましたが、戸籍上は女性同士のため婚姻は出来ていません。

僕は、男性ホルモンの投与により、自分の身体の外見は十分男性的になったと感じています。さらに男性ホルモンの効果で投与開始後から一度も月経は来ていませんので、わざわざ外科手術をしてまで卵巣を摘出する必要は感じていませんし、希望もしていません。そのことで性同一性障害者の性別の取扱いの特例に関する法律（以下、「特例法」といいます）の要件を満たさず、自分の戸籍上の扱いが女性のままであることについては、自分の存在を全否定されているように感じます。だったら、望まない手術で自分の身体を変えるのではなく法律の方を変えたいと思い、「待っていても法律が変わらないから、自分で裁判手続きをするしか方法がない」と数年前から考え、性同一性障害の専門医と相談をしたり、

【オペなしで！ 戸籍上も「俺」になりたい裁判 申立人鈴木げんさん陳述書（call4 公開版）】

※call4 (<https://www.call4.jp/info.php?type=items&id=I0000075>) 公開用に適宜省略・修正をしています。

※再頒布はご遠慮下さい。リンクは自由にお貼りください。

仲間になってくれる弁護士を探すなどの準備をしてきました。

そして準備が整いましたので、この度、パートナーや友人らの支援を受け、この申立て手続きを行うことにしました。

第 2 生活歴

1 出生（1974年）

1974（昭和49）年に静岡県浜松市で生まれました。出生時には、身体を基準に「長女」として戸籍に記載され、今使用している名前とは異なる「■■」という名前を与えられました。

～省略～

2 小学校入学前（～1981年）

（1）養育環境

～省略～

母が言うには、僕は人見知りせず誰の膝にも入って行く子どもで、母や祖父の会社の人などによく可愛がられたそうです。母からは「我先にしゃしゃり出て行くタイプでひょうきんもの」と言われていました。

子どもの頃に好きだった遊びは、虫取りやザリガニ釣り、カエルやオケラの飼育、工作、お絵描きなどで、保育園では男の子とも女の子とも仲良く遊んでいました。ままごと遊びをするときは、ペット役やお兄さん役をしていました。

世間の性的マイノリティへの偏見の中には、「幼少期の家庭環境に何か問題があって後天的に性的なあり方が特殊になるのではないか」という疑いを持つ人もいますが、幼少期の自覚としても今振り返った評価としても、僕の育った家庭環境に特に特殊な事情はありませんでした。

（2）周囲からの指摘された「男の子みたい」な自己表現

【オペなしで！ 戸籍上も「俺」になりたい裁判 申立人鈴木げんさん陳述書（call4 公開版）】

※call4 (<https://www.call4.jp/info.php?type=items&id=I0000075>) 公開用に適宜省略・修正をしています。

※再頒布はご遠慮下さい。リンクは自由にお貼りください。

保育園では同級生から「おなべ」と言われて突き飛ばされ、泣いた記憶があります。

当時、この言葉の意味がわからず、母に「おなべって言われたよ。おなべって何？」と聞いたことも記憶しています。「おなべ」「おかま」「おとこおんな」等のこの言葉は、小学校時代もよく言われ嫌な気持ちがありました。

高齢な男性の園長先生に「君は男の子みたいだな」と言われたこともあったそうで、この出来事は保育園の連絡ノートにも書かれていました。

同級生や園長先生が僕を「普通の女の子」と違うと感じた要因は、おそらく、スカートを嫌って一切はかないことや、自ら好んで髪が短かったこと、言葉遣いが乱暴なこと、ポーズの取り方等だろうと思います。ポーズというのは、よく、アニメなどに出てくる敵キャラクターを空想しながらたかうポーズをとったり、刀をもつポーズ、ウルトラマンのポーズなどをとって遊んでいた記憶と写真からです。こうした日々の何気ない振る舞いの積み重ねで、いわゆる「男の子らしい仕草」と共通する点がたくさんあったのだと思います。

こうした指摘は、親戚や近所の大人たちからも受けていました。共に暮らしていた母や祖父母だけでなく、法事などで集まった親戚や近所のおじさんたちも、僕のことを「（男の子みたいだから）おちんちんをお母さんのお腹に忘れて来たんだね」とよく言っていました。

（3）自分自身で抱き始めた「自分が女の子であること」への違和感

保育園生の頃から、自分が「女の子」であることへの違和感がありました。当時は、はっきり「自分は女の子ではなく男の子だ」と明確な男子としての自覚があったわけではありませんでしたが、「性別」の区分けの意味が理解できないなりに何かおかしいと感じている状況でした。

【オペなしで！ 戸籍上も「俺」になりたい裁判 申立人鈴木げんさん陳述書（call4 公開版）】

※call4 (<https://www.call4.jp/info.php?type=items&id=I0000075>) 公開用に適宜省略・修正をしています。

※再頒布はご遠慮下さい。リンクは自由にお貼りください。

例えば、おやつに食べるお菓子や大人に読んでもらう絵本は、たいていいくつか選択肢があって「どっちがいい？」と聞かれて選ばせてもらえるのに、性別が関係することは「どっちが良い？」と誰も聞いてくれません。自分で選ばせてもらっていないのに、なぜか「女の子」と割り振られ決めつけられていて、「変だなあ、嫌だなあ」と思っていました。

当時、子どもなりに自分のもやもやする気持ちに向き合った出来事として記憶しているのは、4歳の時のことです。保育園のトイレで、自分は個室で用をたした後、男子用の小便器が視界に入りました。その小便器を眺めながらふと「男の子と女の子とどっちが得なのか？」と思いを巡らせました。「女の子はスカートとズボンとどっちもはけるから女の子にしよう」と結論づけた記憶があります。別に僕はスカートの着用は好きではありませんでしたが、「どっちもはけるのは得だから」と無理やりにでも考えるようにしました。

あの時の心境は、「女の子だとお得だ」と自分が女の子であることを素直に好意的に受け入れていたわけではなく、一種の諦めの心境でした。上述のとおり、親戚など周囲の大人たちから「おちんちんをお母さんのお腹に忘れて来た」とよく言われていたので、自分が「男の子」でないのは「忘れ物をした自分が悪い」と考えていました。今思えば、子どもなりに自分の性別を受け入れられない葛藤を整理するため「女の子」であるべき理由を考えたのだと思います。

3 小学生時代（1981～1987年）

（1）入学、ランドセル

1981（昭和56）年、浜松市立の小学校に入学しました。

小学校入学にあたり、祖父にランドセルを買ってもらいました。当時のランドセルは女子は赤、男子は黒という2色が一般的で、僕が買って

【オペなしで！ 戸籍上も「俺」になりたい裁判 申立人鈴木げんさん陳述書（call4 公開版）】

※call4 (<https://www.call4.jp/info.php?type=items&id=I0000075>) 公開用に適宜省略・修正をしています。

※再頒布はご遠慮下さい。リンクは自由にお貼りください。

もらったランドセルの色は赤色でした。色については「自分は緑が好きだけれど、そもそも緑のランドセルはどこにも売っていない。緑でなければ赤でも黒でも、どうせどちらも好きな色ではない。」という気持ちだったので、赤色であることに拒否感はず、
「普段は厳しい祖父から贈り物をもらった」ということが嬉しかったです。

今思えば、当時「男子の黒色のランドセルが欲しい」という気持ちにならなかったのは、上述の4歳の頃の諦めの気持ちが背景にあったのだと思います。

でも、小学5年生の頃、習字の塾で静岡大学附属小学校に通う女子の友達ができ、その子のランドセルが黒だということを知り衝撃を受けました。たまたまその友達の自宅に遊びに行くことになり、その子の部屋に入ると黒いランドセルを見つけました。習字の塾で会うときはランドセル以外の鞆を使っていたので、その時に初めて「黒いランドセルを使う女子がいる」と知ったのです。僕はびっくりして「なんで黒なの？」と友達に聞きました。友達は「付属は（男女関係なく）みんな黒だよ」と教えてくれました。「え、女子が黒でもいいの？なんでそれが許されているの？」という驚きと、「ずるい。うらやましい」といううらやむ気持ちが湧き上がりました。そうした気持ちから「（ランドセルを）触って良い？」と尋ね、黒いランドセルを触らせてもらいました。

触らせてもらっている時にはうらやましいと思いつつ、赤いランドセルが嫌だなんて言ったら、ランドセルを買ってくれたおじいちゃんが悲しむし、4歳の時の「諦める」という気持ちがずっと続いていたので、自分には選べない、願ってもどうしようもないことだと思っていました。

（2）小学校時代の友人関係

小学校の同級生と遊ぶときの相手は男子の友達ばかりでした。5、6

【オペなしで！ 戸籍上も「俺」になりたい裁判 申立人鈴木げんさん陳述書（call4 公開版）】

※call4 (<https://www.call4.jp/info.php?type=items&id=I0000075>) 公開用に適宜省略・修正をしています。

※再頒布はご遠慮下さい。リンクは自由にお貼りください。

年生の頃になると、同級生たちは男女一緒には遊ばなくなり、「女子」の中で僕だけが男子の人間関係の中にいました。例えば、男子の中で誰か誕生日を迎えると、その子の自宅で誕生日が催され、招待された子は自分の誕生日を迎えると招待し返していたのですが、その誕生日会には「女子」では僕1人だけが呼ばれていました。

同級生の女子たちは僕のことを「あの子は男子の誕生日会に行った」「男子と遊んでた」「変態だ」と話していました。女子たちの言葉のニュアンスとしては、僕は男子に媚びを売っているような意味ではありませんでした。保育園の頃の同級生が僕のことを「おなべ」と悪口を言っていたのと同じように、僕の「普通の女子とはちがう」という振る舞いへの嫌悪感や戸惑いを示していたのだと思います。

(3) 「男子」ではない自分についての諦め

男子の友達と仲良く過ごす一方で、「女子だから諦める」という悔しさも日々感じていました。

例えば、野球やサッカーなどのスポーツ競技をするとき、休み時間や放課後、休日に好きで遊ぶ時には混ぜてもらえましたが、地域にあった野球のクラブやサッカーの少年団には「女子」であるために加入できませんでした。小学生の時は特にサッカーが好きでサッカーの少年団に入りたいと思っていましたが、もし「入りたい」と言っても「女子はだめ」と拒まれるのが分っていたので、「入りたい」と意思表示することもなく諦めていました。

もし「入りたい」と言ってしまったら、周囲の大人を困らせる、だから言うてはいけない、とも考えていました。大人から「女子なのにそんなことを言うなんていけない」と怒られる想像ではなく、「女子なのにそんなことを言う子は今までいなかったから、どうしていいかわからな

【オペなしで！ 戸籍上も「俺」になりたい裁判 申立人鈴木げんさん陳述書（call4 公開版）】

※call4（<https://www.call4.jp/info.php?type=items&id=I0000075>）公開用に適宜省略・修正をしています。

※再頒布はご遠慮下さい。リンクは自由にお貼りください。

い」と困らせてしまうと思っていたのです。自分の周りの優しい大人達はきっと気を遣って自分の気持ちを親身に聴いてくれるだろうけど、結局自分が女子である以上は「男子のための集まりに入れない」という壁を乗り越えられないから、大人達はどうしようもなく困ってしまうと想像していました。

そのため、心の整理をつけるため、「どうせ男子には勝てない」と自分に言い聞かせました。身体の大きさや筋肉量という生物学的な違いだけでなく、当時はクラスのリーダーに選ばれるのは男子ばかりという傾向が今よりも強かったので、「自分は勝てない」と考えていたのです。

その時感じていた悔しさは、「スポーツが好きなのにできない」ということだけではありません。性自認が女性の女子にとっても、男子のクラブしか無くて入団できず、競技を楽しむ機会が男子より少なければ悔しく感じるだろうと思いますが、僕が当時感じていた悔しさは、それとは違う種類の悔しさでした。というのは、もし仮に当時女子のサッカークラブが存在していたとしたら、自分が「女子」用のクラブに割り振られることが、よりいっそう辛く悔しかっただろうと思うからです。僕は、男子として、他の男子と対等に、スポーツを楽しみたかったのです。

他にも「女子はだめ」という諦めは、色々な場面で生じました。例えば職業選択の希望を語る場面です。浜松市にある動物園では、子ども向けの催しが度々ありました。みんなで虫について学ぶ企画や、水中生物について学ぶ企画、飼育体験企画などです。当時、僕は将来、動物園の飼育係になりたいという憧れがあったので、そうした企画に参加した時に自分もいつかこんな風に動物園で働けるのかもしれないとわくわくしました。でも、そうした夢を話した時に大人から「女子は飼育員にはなれない」と言われました。ショックもありつつ、諦めを日々経験してい

【オペなしで！ 戸籍上も「俺」になりたい裁判 申立人鈴木げんさん陳述書（call4 公開版）】

※call4 (<https://www.call4.jp/info.php?type=items&id=I0000075>) 公開用に適宜省略・修正をしています。

※再頒布はご遠慮下さい。リンクは自由にお貼りください。

たので「あ、まただめなのか」と受け止め、反発する気力もありませんでした。

今振り返ると、「女子はだめ」という壁にぶつかる経験が日々生じるので、自分が「諦める」という選択をしていることすら、当時は自覚がありませんでした。今、大人として公立中学の制服の選択肢を増やすために、中学生たちの話を聞きながら一緒に解決に向けてのアクションを起こす活動をしているからこそ、あの時の自分は「諦めていたのだ」と気づくことができました。（だからこそ、今の僕には「子ども達には性別のことで諦めてほしくない」という思いがあり、今「浜松TG研究会」などの取り組みで子どもたちのサポートをする日々の活動につながっています。）

（４）「女子」の制服を着る将来への葛藤

そんな風に、諦めていることすら自覚していなかった自分にとって強烈に葛藤を自覚したのは、中学校に行ったら女子の制服を着なければならない、ということでした。

小学校４年生の頃、僕がスカートを履かずズボンしか履いていないことについて、大人から「今どんなにスカートが嫌でも、中学生になったらあれを着るんだぞ」と言われました。それまでは意識していなかったのに、その発言を聞いてから「あ、あれだ」と意識するようになりました。「中学校の制服にむけたカウントダウンが始まっている」と感じるようになりました。

それ以降、小学校の帰り道に制服を着た中学生とすれ違うと、「あれを着たくない」という気持ちが生じ、その度に自分の気持ちを押し込め込むように「中学に行ったらあれを着なくてはならない」と自分に言い聞かせるようになりました。

【オペなしで！ 戸籍上も「俺」になりたい裁判 申立人鈴木げんさん陳述書 (call4 公開版)】

※call4 (<https://www.call4.jp/info.php?type=items&id=I0000075>) 公開用に適宜省略・修正をしています。

※再頒布はご遠慮下さい。リンクは自由にお貼りください。

小学生のときに住んでいた地域の公立中学校の女子の制服は、～省略～で、自分が着るかどうかに関係なく、純粹に制服のデザインを評価する目でいま思い返すと、決して悪いデザインではありませんでした。むしろ、シンプルでかっこいいと思えるデザインでした。なので、自分が制服のデザインを好きかどうかという問題ではありません。男女別に分けられた女子用制服を着ることで「自分は女だ」と公言して歩くように思えて、その点に強烈な違和感がありました。

その違和感は、「自分は女子じゃない」というアイデンティティから生じるものです。今ではそのことがはっきり自覚できるのですが、当時「自分は女子じゃない」ともやもや感じつつも、それを言葉ではっきり表現してはいけない、自覚してはいけないと感じていました。

そして、当時の僕は、「義務教育」というのは「子どもが学校に行く義務」だと理解していたので、どんなに制服が嫌でも学校に行くために我慢しなければいけないとっていて、「あの制服を着るのは嫌だ、なんとかして欲しい」と、友達や家族に相談するなんて思いつきもしませんでした。「女子の制服を嫌だと感じる自分はわがままだ」と自分を責めて気持ちを抑えつけていました。

その後の小学生時代、ある時テレビでバーテンダーの制服を見たとき、自分が当時入学予定の中学の女子制服に似ていることに気が付きました。「あの制服（入学予定の中学の女性制服）は、大人のお酒を作る男の人の着る服だ」と、自分に言い聞かせて中学入学までの魔のカウントダウンの辛さをしのぎました。「あの制服は、中学生女子の服ではなくて、大人の男性の着る服だから自分が着ても大丈夫だ、自分が着ても女子になるわけではない」と言い聞かせていました。実際には、その後浜松市内で引っ越しをして中学校区が変ってしまいました。僕が入学し

【オペなしで！ 戸籍上も「俺」になりたい裁判 申立人鈴木げんさん陳述書（call4 公開版）】

※call4 (<https://www.call4.jp/info.php?type=items&id=I0000075>) 公開用に適宜省略・修正をしています。

※再頒布はご遠慮下さい。リンクは自由にお貼りください。

た中学校の女子制服は■ ■のセーラー服で、自分の気持ちを紛らわせようがなく、ただただ「義務だから」と我慢をすることしかできませんでした。

（５）「男の子」としての初恋

初恋は小学生の頃で、ある女性の先生が好きでした。当時はそのことに全く気が付かず、自覚がありませんでした。「女子の自分が女の先生のことを好きになるわけがない」と無意識に思っていました。小学校卒業寸前に先生から結婚するという話を聞き、ショックを受けましたが、自分でも何になぜショックを受けているのかもわかりませんでした。

大人になってから、性同一性障害の専門医であるジェンダークリニックに通院し、自分史として自らの幼少期を振り返り整理していく中で、実はあれば初恋と失恋だったのだとようやく気づきました。

４ 中学生時代（１９８７～１９９０年）

（１）「女性制服」を身にまとう苦しさ

１９８７（昭和６２）年、僕は浜松市立の中学校に入学しました。

上述のとおり、女子制服であるセーラー服を着るのは苦痛でしたが、「義務教育だから義務だ」「３年間だけの我慢」と自分に言い聞かせ、毎日毎日ひたすらに我慢していました。とはいえ、嫌な気持ちがどうしても抑えきれず、朝起きても制服をなかなか着ることができませんでした。朝ごはんを食べたり、身支度をちゃんとする気持ちの余裕はなく、ぎりぎりの時間まで本を読んだりして気を紛らわせ、登校時刻５分前になってようやく制服を着て走って学校に向かう毎日でした。学校に到着するのはたいてい遅刻ギリギリで、間に合わず遅刻になることも頻繁でした。

教師からは、遅刻が多い、身だしなみができていないとよく注意を受

【オペなしで！ 戸籍上も「俺」になりたい裁判 申立人鈴木げんさん陳述書（call4 公開版）】

※call4（<https://www.call4.jp/info.php?type=items&id=I0000075>）公開用に適宜省略・修正をしています。

※再頒布はご遠慮下さい。リンクは自由にお貼りください。

けていましたが、当時は自分でも、なぜ気持ちや体を動かして制服を着ることができないのか、なぜスムーズに学校に足が向かないのか、ちっとも理由が分らず自分でも不思議でした。当時は、「登校ぎりぎりまで本を読んでいる」行動が「気を紛らわせている」という意味であることに気づきもしませんでした。40歳を過ぎてからジェンダークリニックで自分史として過去を振り返り、当時の気持ちのつじつまが整理され、自分の行動の意味が分かったために「あの時の自分はストレスから気を紛らわせていたんだ」と自覚できたのです。専門の医師に数ヶ月にわたり寄り添ってもらい、「性別のことで嫌だと思う時に、嫌と言って良いんだ」と安心感を持てるようになってようやく「自分は制服が嫌だったんだ」と気づくことができました。

当時、学校では、女子の制服を着ているため心に余裕がなく、息をしているのが精一杯の心境でした。勉強をしたり部活で汗を流したり、友達を作ったりする余裕は全くありませんでした。

特に体育では、プールの授業で水着を着ることに抵抗があり、足の爪を少しそいで指を痛めることや、虫刺されを掻きむしって化膿させプールの授業が免除されるように工夫したりと、自分なりの抵抗をしていました。

当時は、今のように私服で学校に通えるようなところがあるわけではないので、「私服で通学する」という発想に至ることもなく、どうしたら自分が少しでも学校に通いやすくなるのか全く出口が見当たらない気持ちでした。「男子の制服を着る」という選択肢も思いつきませんでした。もし、あの頃僕が、私服や男子制服を着る選択肢を思いついていたれば、そうしただろうと思います。

いずれにしても、「女子用の制服を着て通学する」以外の選択肢が

【オペなしで！ 戸籍上も「俺」になりたい裁判 申立人鈴木げんさん陳述書 (call4 公開版)】

※call4 (<https://www.call4.jp/info.php?type=items&id=I0000075>) 公開用に適宜省略・修正をしています。

※再頒布はご遠慮下さい。リンクは自由にお貼りください。

あつたら、僕は学校に行くことがもっと楽になれていたのと思います。

(2) 「女子」でいられないことで行き詰まる友人関係

僕は女子のジェンダーロールに則ったことができないため、女子の同級生の人間関係に馴染むことができませんでした。例えば、女子と一緒にトイレに行くという行動や、流行り物など女子の話題などに全くついていけませんでした。自分なりに頑張って話を合わせようとしても、知らないままでその場しのぎで話していると辻褄が合わなくなり、「嘘つき」「裏切り者」と言われることもありました。

例えば、芸能人の流行では、僕の小学校時代はCCBやチェッカーズが流行していました。女子が好むような男性芸能人に興味をもつことがなかったため、女子同級生から話題を振られる時にしか芸能人の写真を見ないので、そもそも顔を覚えて判別することもできませんでした。流行りの雑誌の切り抜きを見せられ「誰が好き？」と聞かれる、その都度適当に指を指して「この人」と答えていたら、「答える度に好きな人が違う、嘘をついてる」と言われるようになりました。そこで考えた工夫は、CCBであればピンク色の髪の人、チェッカーズであれば髭のある人を「好きな人」として選ぶと決めることでした。そうすれば、楽器などの目印がなくても毎回特定の人を指すことができるからです。

ところが中学生になると、光GENJIなどのジャニーズ系の男性アイドルが流行し始めました。そうしたアイドルグループでは、特徴的な髪の色や髭の人はおらず、メンバー全員が同じような流行りの髪型でした。メンバーを見分ける手段がなくなってしまったので、「自分が好きなのはさだまさしさんだから、みんなと話が合わなくてもいい」と、周りの女子と話を合わせるための嘘に限界を感じました。

また、ジェンダーロールという点では、「誰も見ていない」と思って

【オペなしで！ 戸籍上も「俺」になりたい裁判 申立人鈴木げんさん陳述書（call4 公開版）】

※call4（<https://www.call4.jp/info.php?type=items&id=I0000075>）公開用に適宜省略・修正をしています。

※再頒布はご遠慮下さい。リンクは自由にお貼りください。

教室の隅や廊下で着替えてしまい、誰かに見られていて「変態」など悪口が始まりました。また、女性の同級生たちが無駄毛を処理していることの意味が分からず、僕は脇毛などを剃るなどの処理をしなかったことで、そのことでもまた「変態」と言われました。

そうした馴染めなさを発端に、同級生からのいじめにも遭いました。本心では、学校に行くのは嫌でしたし、生きているのが辛いという気持ちもありました。それでも中学校時代を生き延びることができたのは、昆虫採集をして標本を作ることや、小学校時代に住んでいた町内のまつりでラッパを吹くことや、保育園のときから通っていたキリスト教会の教会学校（子どもの礼拝）など、学校以外の場で好きなことや自分の居場所が明確にあったからです。もし不登校になったら「学校に行かないのなら昆虫採集は禁止。まつりと教会にも行ってはいけない。」と親から言われそうで、最後の砦となる居場所を失わないように、何とか頑張って登校を続けました。

僕にはたまたま自分を支えてくれるものがありました。もしそうした支えがなかったら、学校に火を付けるとか自分を含む誰かを傷つけるとか、取り返しのつかないことをしていたかもしれません。

性的マイノリティの子ども達は、学校でなじめなかったり、いじめ被害にあったりすることが珍しくありません。今もまだまだ、当時の僕と同じように苦しんでいる子どもたちはたくさんいます。

（3）男性物の服を着る私生活

私服を着られる時間では、次第に男性物の服を着るようになりました。

僕は母から私服でもスカートを履くようにと言われてましたがスカートを履くのは嫌でたまらず、かといって中学生には自分で服をそろえるお

【オペなしで！ 戸籍上も「俺」になりたい裁判 申立人鈴木げんさん陳述書（call4 公開版）】

※call4 (<https://www.call4.jp/info.php?type=items&id=I0000075>) 公開用に適宜省略・修正をしています。

※再頒布はご遠慮下さい。リンクは自由にお貼りください。

金もないので、僕は父の服を黙って着るようになりました。父は男性としては小柄な方なので、僕でも父の服を着ることができたのです。それでも僕の身体から見れば大きいサイズではあるのですが、大きいサイズの服を着て猫背の姿勢をつくると中学生になってから膨らんできた胸を隠すこともできるという利点がありました。そうして過ごしていると、次第に母も僕が希望をする服を買ってくれるようになりました。

中学2年生の頃、大好きだった祖父が亡くなりました。形見として祖父のネクタイをもらい毎日つけていました。靴は、祖父の革靴の先に新聞を詰めて履いていました。父の服と同じく、あまりサイズに違和感のない手近な男性ものの服として着ているという側面も大きかったのですが、周囲の人から「形見だから着たいんだろうね」と思ってもらえれば、「男性ものを着たがる変わった女の子」という目を向けられずに済むと期待する気持ちもありました。

5 高校生時代（1990～1994年）

（1）苦しさから逃れ新しい環境へ

中学での学校生活に限界を感じていたので、同じような生活を続けるのはもう無理だと考え、苦痛を感じる状況を変えるために一番の望みは「就職して自活すること」でした。そうしたら好きな服を着て、好きな髪型をして、好きに暮らせると思えたからです。

一方で、僕が中学2年生の時に亡くなった祖父は、生前、僕に「高校だけは行ってくれ」と強く求めていました。大好きな祖父に高校への進学を約束していたので、約束は守りたいと思い、自分にとって一番ましに感じられる進学先を探しました。

そうして選んだ高校は、地元浜松から離れた■■■県の山間部にある農業高校でした。1学年20人程度のとても小さい全寮制の学校でした。

【オペなしで！ 戸籍上も「俺」になりたい裁判 申立人鈴木げんさん陳述書（call4 公開版）】

※call4 (<https://www.call4.jp/info.php?type=items&id=I0000075>) 公開用に適宜省略・修正をしています。

※再頒布はご遠慮下さい。リンクは自由にお貼りください。

教員も家族と共に学校の敷地内に住んでいて、そこで生活の全てが完結する小さいコミュニティでした。幸い、そこでは中学の時のような息苦しさはなく、むしろ生徒の声を大切に聞いてくれる先生がいて、大人自身が権利のために戦う姿を見て感じることができ、自信をもつことができました。自分も次第に「自分の力は小さくて、何も変わらないと思っていたけど、意外とそうではないのかも」「ぶつかれば動くこともある」「自分の生き方は自分で切り拓くことができる」という信念が育っていきました。

（２）自分らしい服装での学校生活

高校でも女子生徒の制服はスカートでしたが、仲良くなった理科の先生に「制服のスカートが嫌だ」と何気なく言ったら「俺の授業のときは好きな服装で来てもいい。他の先生に何か言われたら、スカートは実験の時に危ないからって言っとけばいい。」と言ってもらえて、とても嬉しく、その日からスカートは穿かずに毎日ジャージで登校しました。理科の授業がない日は、「今日は体育があるから」とか「実習で着替えに帰る時間がなかった」とか言い訳をして誤魔化していました。

下着は男性物のトランクスを穿くようになりました。当時、女子の同級生の間でトランクスを普段着として穿くのが流行していました。女子の同級生は、女性用の下着を穿いた上に男性用のトランクスを穿いて半ズボン代わりの普段着にしていました。そのおかげで「この手を使えば、自分も男物のトランクスを穿ける。女もののパンツを穿かなくていいんだ」と思えました。もっとも、僕は女子の同級生たちとは違って下着として使用していたので、女性用の下着を穿かずに男性用トランクスを穿き、その上に普通のズボンを穿いていました。当時は、男性ホルモン投与をしている現在と違って、身体的には全くの女性でしたのでウエスト

【オペなしで！ 戸籍上も「俺」になりたい裁判 申立人鈴木げんさん陳述書（call4 公開版）】

※call4（<https://www.call4.jp/info.php?type=items&id=I0000075>）公開用に適宜省略・修正をしています。

※再頒布はご遠慮下さい。リンクは自由にお貼りください。

サイズが男性よりも細かったのですが、逆にお尻周りが大きいので男性用の M サイズのトラックスを穿いてもずれ落ちることなく使用することができました。

（3）女子生徒を恋愛対象の「異性」として意識

高校 3 年間は女子寮で生活しましたが、一学年に女子は 5 人～ 13 人程度（同級生の女子は 10 人）という少人数で、農家実習に一緒に行ったりお互いに切磋琢磨していたので、基本的に居心地の悪さはありませんでした。でも、入浴の際や部屋で女子の友人と過ごす時には、同級生を「異性」として意識してしまい戸惑いがありました。

浴場は一度に 5 人程度入れる規模で、女子寮の生徒全員が 1 時間半程度の時間内に同じ場所を使用するので、同時に 4～5 人が浴場内にいるという状況で、混雑している中で入浴することが多かったように記憶しています。壁際にシャワーが 1 つ、蛇口が 1 つありましたが、それはいずれも水の出が悪いので使用する人はおらず、皆は湯船のお湯を手桶ですくって湯船のそばで頭や身体を洗っていました。その場所だと身体を洗う時に湯船の中にいる人と向かい合うような形になってしまいます。僕は、女子の隣で身体を洗うことも、自分の身体を湯船にいる女子に見られることも嫌だったし、湯船の中の女子の体が自分の視界に入るのも良くないと思い、常に一人だけ壁に向かう形で、お湯の出が悪いシャワーを使用して身体を洗っていました。

なお、脱衣所は灯りが乏しく暗く、一方向にしか脱衣棚がないためみんな同じ方向を向いていて、お互いの身体を見なくて済みました。

部屋は、基本的には各学年から 1 人ずつ、学年の異なる 3 人が同室になると決まっていました。各部屋には 2 段ベッドが 2 つあり、左側の 2 段ベッドを 3 年生が一人で使い、右側のベッドの上段が 1 年生、下段

【オペなしで！ 戸籍上も「俺」になりたい裁判 申立人鈴木げんさん陳述書（call4 公開版）】

※call4 (<https://www.call4.jp/info.php?type=items&id=I0000075>) 公開用に適宜省略・修正をしています。

※再頒布はご遠慮下さい。リンクは自由にお貼りください。

が2年生と決まっていた。1年生の頃は、先輩にスリッパの足音も注意されるくらい寮生活は厳しく、先輩が同じ部屋にいる緊張感で「異性と同一部屋にいる」という緊張はありませんでした。

女子寮では日曜日になると同級生が他の子の部屋を訪ね、ベッドのふとんの上で一緒に座り漫画を読んだり話をしたり、眠くなると昼寝をして過ごすのが一般的でした。僕の部屋にも女子同級生が遊びに来ることがありましたが、自分のベッドのふとんに女子がいるのは居心地が悪く、さらにふとんの中に入られると、恥ずかしくて照れる気持ちで耐えられず、「やめろよ、入るなよ」などと言って拒んでいました。当時思春期の僕は、はっきりとした自覚はありませんでしたが、女子の同級生を恋愛対象である「異性」として意識していたのだと思います。

女子寮の中で、他の子が自分のふとんに入るのを拒むのは僕だけだったので、同級生は「なんで？」と不思議がっていました。当時は、そのことについて直接何かを言われることはありませんでしたが、実は後に同窓会で教えられたのですが、当時「げんは寝しょんべんを隠してる」という噂がたっていたそうです。

6 高校卒業後、葛藤を抱えながらの人生の模索（1994～2003年）

（1）「女性」として働くことへの拒否感

高校を卒業してアパートで一人暮らしを始めました。高校時代の同級生だった男友達が家出をして僕の部屋に住み着いていて、多い時は3人もいて合宿所のような雰囲気でした。そういう仲間とは交際関係はなく、純粹に対等な友達として毎晩のように一緒にゲームセンターに行ったり、カラオケに行ったり、飲み会をしたりして過ごしていました。毎日雑魚寝で、着替えや風呂はどうしていたのか全く記憶がないのですが、僕も

【オペなしで！ 戸籍上も「俺」になりたい裁判 申立人鈴木げんさん陳述書（call4 公開版）】

※call4 (<https://www.call4.jp/info.php?type=items&id=I0000075>) 公開用に適宜省略・修正をしています。

※再頒布はご遠慮下さい。リンクは自由にお貼りください。

友達も違和感や困ったことは特になく生活をしていました。

1994（平成6）年、昆虫の細密画を勉強するために19歳で■■■
■■■に入学し、1996（平成8）年に卒業しました。

しかし、プロとして昆虫の細密画だけで食べて行くのは難しいだろうとも思い、旧知の仲の獣医さんに声をかけてもらい、1995（平成7）年から2年間、浜松市内の動物病院に勤務しました。動物に関わる仕事は好きで幼い頃から憧れがあったので嬉しかったです。ただ、就職する時の条件として「ナース服は無理。スカート系は全部無理。ピンクのエプロンもフリフリも無理。白いサンダルも無理。女子便所も女子更衣室も無理。」と求めています。受付担当の従業員の女性がそうした服装だったので、自分もそうした服装を指定されたら困ると不安になり「あれはどうしても無理」と相談しました。（医院長である獣医の先生は、カタログにのっている服ならなんでもいいと言ってくれたので、違和感のない男性物の白衣を選ぶことが出来ました。）

僕の身近にいたロールモデルになるような男性たち（祖父や父、その他親戚の男性たち）はたまたま全員自営業者だったので、自分も美学校の通学が終わったらいずれは自営業者になると当然のように思っていました。そこで、美学校を卒業した1997（平成9）年、22歳で動物病院を退職し、「GENイラスト工房」を設立して、イラスト制作の仕事を始めました。企業のホームページやチラシ、冊子の制作などを手がけました。

僕はスカートのスーツも、女子の制服も化粧も、トイレや女子更衣室も、僕には全部無理だと確信していたので、人に雇われるのではなく自営業で生計を立てることはその意味でちょうどよかったです。実際、イラストの仕事をするようになってからの仕事着は、ワイシャツにネクタ

【オペなしで！ 戸籍上も「俺」になりたい裁判 申立人鈴木げんさん陳述書（call4 公開版）】

※call4（<https://www.call4.jp/info.php?type=items&id=I0000075>）公開用に適宜省略・修正をしています。

※再頒布はご遠慮下さい。リンクは自由にお貼りください。

イにジーパン、冬はその上に紺色のブレザーでした。

（２）「おなべ」 「性同一性障害」という生き方への誤解と葛藤

その後、ネットの掲示板を通じて初めてトランス男性の人たちと出会い、交流をしました。その人たちは皆、いわゆる「おなべバー」（トランス男性がスタッフとして接客するバー）で働いている人たちでした。自分と似た境遇の人と出会えた嬉しさもある一方で、身体の性別を越えて生きていくには「おなべバー」で働く人生しかないのかと思い込み、僕は他人と話をするのも上手くないし、酒もそんなに強くないからバーでは働けず、彼らの仲間には入れないのだと思いました。「おなべバー」での働き口がなければホルモン注射や手術をして「男になる」生き方はできないのだという閉塞感もありました。

浜松市にも「おなべバー」と呼ばれる店があり、友人に遊びに行かないかと誘われたこともありましたが、もし行ってしまったら、「自分が本当はどう生きたいのか」「自分はおなべバーの店員さんのように男にはなれない」など、辛い現実を見なければいけないような気がして、行ってみたい気持ちを一生懸命抑えていました。

一方で、25歳くらいの時にフィリピン人のトランス女性と交際をして、初めて「ダーリン」と呼ばれたことを「しっくり来る」「嬉しい」と感じ、そんな気持ちになる自分に驚きました。

ちょうどその頃、2001（平成13）年、僕が26歳の時にテレビドラマ『3年B組金八先生』の第六シリーズで、俳優の上戸彩さんが性同一性障害の生徒役として登場し、世間の注目を集めました。僕はそのドラマをたまたま目にして「あれ？自分の性別のもやもやはこれなのか？」と思いましたが、まさかテレビドラマと自分がリンクしているとは思えず、もやもやは増していきました。

【オペなしで！ 戸籍上も「俺」になりたい裁判 申立人鈴木げんさん陳述書（call4 公開版）】

※call4 (<https://www.call4.jp/info.php?type=items&id=I0000075>) 公開用に適宜省略・修正をしています。

※再頒布はご遠慮下さい。リンクは自由にお貼りください。

しばらくして高校の同窓会があったので、酔った勢いで同級生の男友達に「自分は性同一性障害かも…」と心境を打ち明けてみました。友達は「別に男でも女でも、げんはげんだし友だちだし。どっちでも良いんじゃない？」と言ってくれたので、ほっとしました。

でも、もやもやはスッキリとはせず、「こんなことで病院に行っただして…、女じゃないことがはっきりしたとしても男になれるわけじゃない、ちんちんが生えてくるわけじゃない」「自分がどうしたいのかがはっきりわからないのに、わざわざ病院だけ行ってもしょうがない」と一生懸命自分に言い訳をし、病院に行くことはなく過ごしていました。

病院については、埼玉医科大学で性同一性障害の診断や治療が受けられることをインターネットで知ったのですが、自分にはお金も休みもなく埼玉まで行くなんて現実的な選択肢には思えず、「遠方に住む自分にはできない…」と感じていました。

7 男性との結婚、竹細工との出会い（2003年～2012年）

（1）男性との結婚

2003（平成15）年、28歳の時に男性と結婚しました。

～省略～

僕はこの時点では、自分自身を「女性」とも「男性」とも認識しておらず、「自分には性別もないし、相手の性別も関係無しに好きになる」「こんな人間は世の中に自分ひとりだけだ」と思っていたので、結婚相手の性別のことは特別気にしないように努めていました。当時は、そういう自分の性のあり方や悩みを表現する言葉すら知らず、相手の男性には自分の葛藤を告げることもできず、相手は僕のことを「ボーイッシュな女性」と認識している状態で結婚するしかありませんでした。

【オペなしで！ 戸籍上も「俺」になりたい裁判 申立人鈴木げんさん陳述書（call4 公開版）】

※call4（<https://www.call4.jp/info.php?type=items&id=I0000075>）公開用に適宜省略・修正をしています。

※再頒布はご遠慮下さい。リンクは自由にお貼りください。

結婚生活では、生活費を半分ずつ負担し合い、家事もきっちり対等に分担していました。外食は割り勘せず、自分の食べた分は自分で支払うスタイルでした。日常的な共同生活においては特に支障なく過ごせたと思います。

～省略～

当時の自分は、「性別が嫌だとか、自分は女じゃないなんて、主張しても変えられる訳じゃない。こんなことは誰にも分からないから、言ってもしょうがない」と諦めもありつつ、一方で、性別を特定するような言葉で自分を呼称されることへの嫌悪感も強く、割り切れない葛藤が毎日続いていました。例えば、「彼女」や「娘さん」はもちろん苦痛だし、「雨女」「おばさん」「ベリーショート」（男性であれば普通の短髪なのに、「女性」だと「ベリーショット」という）等です。そのため、「奥さん」と呼ばれたら「自分は外さんだから、奥さんじゃない。」と言い返したり、自分の配偶者を「ご主人」と呼ばれると「自分の主人は自分だから、あいつじゃない。」と言い返したり、自分なりの表現で他者から性のあり方を押しつけられることに反発していました。

（２）竹細工との出会い

2004年に結婚した直後、知人が企画したイベントで、昔ながらの竹かご職人■■■■さんと出会いました。■■さんと話をするうちに、曾祖父と祖父もなりわいにしていた竹細工に自分も関わりたいという気持ちが高まり、弟子入りをしました。

すぐには竹細工で生計を立てられるようにならず、仕事仲間に単純なデザインの仕事を回してもらい、その仕事で収入を得て働きながら師匠の元へ通い、修行を続けました。

4年後の2008（平成20）年、僕はギランバレー症候群を発症し、

【オペなしで！ 戸籍上も「俺」になりたい裁判 申立人鈴木げんさん陳述書（call4 公開版）】

※call4（<https://www.call4.jp/info.php?type=items&id=I0000075>）公開用に適宜省略・修正をしています。

※再頒布はご遠慮下さい。リンクは自由にお貼りください。

突然に手と足が動かなくなり、入院しました。幸い2ヶ月後には退院し生活に支障のないくらいに回復はしたのですが、この闘病で初めて「自分もいつか死ぬんだ」と実感しました。「明日死んでも悔いがないように生きたい！」と一心発起し、アルバイトとして続けていたデザイン関係の仕事はきっぱりと全て辞めて、竹細工だけで生計を立てる決心をしました。そしてこの闘病生活中に「このまま手足がずっと動かないまま介護を受けることになったら…。僕の性別の悩みを知らない女性介護士さんから僕が「女性」として介護され、僕自身も受け入れがたい「女性」の特徴のある身体を介護士さんたちに晒して、女ものの下着を穿かされるのだろうか」という不安が募りました。

退院後、自分の作品を大きな展示会に出展してみましたが、そこで自分の腕の無さにおどろき愕然とし、1年間単身で修行に出ると決めました。修行先は別府市にしました。別府市は竹の分野で国の伝統的工芸品に指定されているので、優れた職人や作家がたくさんいるからです。別府市での修行を開始して約1年後に網膜剥離をおこして入院と手術を経験しました。再度健康上の不安を感じ、ますます一度きりの人生で悔いなく生きたいとの思いを強くしました。

修行を終えた2010（平成22）年、35歳で独立し「竹の鞆GEN」を設立しました。竹細工の鞆を作って百貨店等で展示会を兼ねた実演販売の場をもち、自分の作品を販売するようになりました。

8 トランスジェンダーであることの自覚、離婚（2012～2015年）

（1）「ナベシャツ」との出会いと人生の変化

2013（平成25）年6月、38歳の時に、NHKのテレビ番組『探検バクモン』で、新宿二丁目や性的マイノリティについて特集され

【オペなしで！ 戸籍上も「俺」になりたい裁判 申立人鈴木げんさん陳述書 (call4 公開版)】

※call4 (<https://www.call4.jp/info.php?type=items&id=I0000075>) 公開用に適宜省略・修正をしています。

※再頒布はご遠慮下さい。リンクは自由にお貼りください。

ているのを偶然に観ました。そこで、トランスジェンダーや性同一性障害のことを改めて知り意識しました。そして、僕のような「女性」の身体をもっているけれどその身体に違和感をもつ人が使用する「ナベシャツ」の存在を初めて知りました。「ナベシャツ」というのは、胸の膨らみを押し潰すように設計されている下着です。乳房除去手術を経っていないトランス男性が、外見からわからないように胸を潰して隠すために開発されたものです。そのテレビ番組では、ナベシャツを開発し販売している会社を紹介していました。

子どもの頃からずっと胸のことで悩んでいた自分にとって、これを機に人生が変わっていきました。ナベシャツの存在を知るまで僕は、自分なりに胸を隠すため常に猫背の姿勢をとり、スポーツブラの下側の部分に手ぬぐいを挟んで、胸とお腹の段差をなくす工夫をしながら生活をしていました。ナベシャツを買いたくてインターネットで検索してみたところ、静岡市内でちょうど翌月に僕のような人向けの勉強会があることがわかり、参加しました。

その勉強会は、海外で性別適合手術を受ける人のためのアテンドをする会社が開催しているもので、性別適合手術について説明する場だったのですが、他にもホルモン治療や乳房除去手術のことも説明してくれました。当時は、性的マイノリティについて信頼できる情報をわかりやすく得る機会がまだ多くなく、僕には初めて知ることばかりでした。

また、この勉強会には、浜松近郊から僕以外にもトランス男性が集まっていたので、はじめてトランスジェンダーの友だちができました。その友だちに、浜松でのセクシュアリティミックスのクラブイベント（性別を一切問われずに参加できるクラブイベント）や飲み会にも誘ってもらって、どんどん仲間が広がっていきました。

【オペなしで！ 戸籍上も「俺」になりたい裁判 申立人鈴木げんさん陳述書（call4 公開版）】

※call4（<https://www.call4.jp/info.php?type=items&id=I0000075>）公開用に適宜省略・修正をしています。

※再頒布はご遠慮下さい。リンクは自由にお貼りください。

それまでは、自分と同じような性のあり方の人に出会ったことはなく、性自認や性的指向も含めて「性のあり方で悩んでいる人間なんて自分ひとりだ」と思っていました。近くに仲間がいるとわかりました。細かくみれば、性のあり方やそれに関する悩みは一人ひとり違いますが、「一緒じゃなくても良い、大丈夫」という安心感がもてました。

（２）男性との結婚生活の限界

2014（平成26）年、39歳でスイスのジュネーブで竹鞆作品の個展を開き大好評でした。仕事は楽しく充実していました。

一方で、男性との結婚生活では、普段の生活で何か具体的な支障やトラブルがあるわけではないのに、「この結婚生活は長く続かないかも…」という気持ちが募っていきました。翌年2015（平成27）年3月相手からの申し出で離婚しました。

～省略～

9 「鈴木げん」としての人生（2015年～現在）

（１）男性としての生活の始まり

2015年は怒濤の変化を起こした年になりました。前述のとおり、3月に夫であった男性と離婚をしましたが、その翌月4月に改名手続きをし、5月からトランスジェンダーの専門的な診察ができるジェンダークリニック「ちあきクリニック」に通院を開始しました。

戸籍の名前は、もともと女性的な名前に違和感があり高校生の頃から友人知人に「げん」と呼ばれて生活をしてきていたので、「生活実績がある」と判断してもらえてすぐに戸籍上の改名をすることができました。さらに、健康保険証について、表面の性別欄には「裏面参照」と記載され、裏面に「戸籍上は女」と記載される、いわゆる「裏書き」記載

【オペなしで！ 戸籍上も「俺」になりたい裁判 申立人鈴木げんさん陳述書（call4 公開版）】

※call4 (<https://www.call4.jp/info.php?type=items&id=I0000075>) 公開用に適宜省略・修正をしています。

※再頒布はご遠慮下さい。リンクは自由にお貼りください。

に変更しました。

そうしたらところ、従来の生活からは信じられないくらいに日々が生きやすくなり、びっくりしました。「シスジェンダー（身体により出生時に割り当てられた性別と性自認が一致する人）ってこんなにスムーズに生きてるんだ！ずるいよ！」と羨ましく感じたことをよく覚えていません。

2015年から通院した「ちあきクリニック」は東京都目黒区にあり、性同一性障害と診断を受けるまでに何度も通院し自分の幼少期からの生活歴を振り返っていきました。そうして自分史を振り返ることで、自分が長らく感じてきた苦しきの正体が「生活実態を含む性自認が男性なのに女性の身体をもっていること」にあると確信を持つようになりました。そうして、自分の気持ちに整理がつくことで生きやすさが増していきました。ただ、東海地方に専門医がいないため東京まで何度も通院することの負担は生じていました。（診察費や治療交通費などの費用を一覧にして添付します）。

「性同一性障害」の診断を受け、初めて男性ホルモンを接種するホルモン療法を開始した時のことは鮮明に記憶しています。医師に、肩かおしりのどちらに注射するか選べると言われ、「おしりを見せるのは恥ずかしいな」と思い「じゃあ肩で」と答えました。左肩に注射を打ってもらうことになり、僕は注射の針が自分の肩に刺さる瞬間をずっと見ていました。これまで注射を打たれる時にこんなに意識して針を見たことはありませんが、この時だけは「見なきゃいけない」と強く思ったのです。

針が肩に刺さる瞬間、「男性ホルモンが身体に入ってきて、僕の声が変わるだろうな」という期待と嬉しさで頭がいっぱいでした。生活歴の冒頭で記載したとおり、僕は子どもの頃から人前に出たがるタイプだっ

【オペなしで！ 戸籍上も「俺」になりたい裁判 申立人鈴木げんさん陳述書（call4 公開版）】

※call4 (<https://www.call4.jp/info.php?type=items&id=I0000075>) 公開用に適宜省略・修正をしています。

※再頒布はご遠慮下さい。リンクは自由にお貼りください。

たのですが、一方で、人前に出た後にいつも自分の声の高さに違和感を感じて心がもやもやしていたのです。ちあきクリニックでホルモン療法の効果として「男性ホルモンを打つと声が低く変化する」と聞いていたので、違和感なく人前で話せるようになるのがとても楽しみでした。

男性ホルモンを投与して3回目くらいになると、声が低くなってきた実感がありました。その後は、2～3週間毎のホルモン注射の度に自分の声を録音して変化を確認していました。生まれながらに身体が男性の人と比べると、僕の声はまだまだ高めかなーと思いますが、それでも以前の声から比べると低く変化したことがとても嬉しくて、とてもしっくりきました。

（2）自分らしさの開拓

翌2016（平成28）年には、いわゆる胸オペ（乳房除去手術）を行いました。当初、山梨大学医学部附属病院で百澤明医師に執刀してもらう予定で、同病院に何度か手術準備の検査のために通院しました。ところが、手術予定日直前にインフルエンザに罹患しオペを延期することになったのですが、同病院でオペ日を再設定するとなると3か月以上後になると言われ、急遽百澤医師が非常勤で勤務する甲府昭和形成外科クリニックでオペを実施することになりました。同クリニックは入院ができないため、僕は手術後数日間ホテルに宿泊し、毎日病院に通いました。

オペの直後、ホテルに戻ったときの僕は、胸にドレーンの管が刺さりその上からサポーターで圧迫されていて、傷口から出る体液を溜める袋をぶら下げた状態でした。普通でいえば痛々しい姿だったのですが、僕は「おっぱいがなくなって嬉しい、この勇姿をカッコよく写真に撮りたい」と、ホテルの部屋の鏡に自分を映して写真を撮りました。新しい人生が始まる嬉しさでいっぱいでした。

【オペなしで！ 戸籍上も「俺」になりたい裁判 申立人鈴木げんさん陳述書（call4 公開版）】

※call4（<https://www.call4.jp/info.php?type=items&id=I0000075>）公開用に適宜省略・修正をしています。

※再頒布はご遠慮下さい。リンクは自由にお貼りください。

そうして無事に胸オペを終えてからまもなく、現在暮らしている浜松市天竜区春野町へ引っ越しをしました。竹に囲まれた山の中の古民家を借り、リフォームして竹細工の工房兼自宅にしました。竹を育てることから始める竹鞆専門の職人であることをアピールポイントの一つにしなから、作品づくりに取り組んでいます。その様子は僕の「竹の鞆GEN」というHPで紹介しているので、HPの一部を添付します（添付②）。

また「浜松TG（トランスジェンダー）研究会」を立ち上げました。地方ではまだトランスジェンダーの認知度や理解度が低く、当事者が仲間と出会ったり正しい情報に触れたりすることも簡単ではありません。そこで「浜松TG研究会」はトランスジェンダー当事者やアライ（性的マイノリティに対する理解者や仲間）、専門家たちとともに、特に学校関係者や医療関係者などを中心に多くの人たちを巻き込み、当事者の生活上の困りごとを解決していくための活動をしています。そうした活動を通じて、性のあり方にかかわらず誰もが自分らしく生きられる社会をつくることを目指しています。活動の様子がわかる資料を添付します（添付③）。

具体的には、「みんなの居場所づくり部」と称して、トランスジェンダー当事者を中心に集まって交流できるリアルな場を定期的で開催したり、専門医や大学の先生など専門家を招いて勉強会をしたり、電話や対面での相談を受けたり、特に教育関係者に向けた「出張LGBT講座」などを行っています。僕も、性別に違和感をもつ子どもたちのことや、多様な性のあり方について、自分ごととして考えてもらえるような講演をしています。また、各学校の男女別制服に苦しんでいる子どもたちの声を聞きながら、自らの性自認に沿った制服の選択ができるように学校と交渉をしたり、そもそもの制服のルール自体を「どの子ども自由に選択が

【オペなしで！ 戸籍上も「俺」になりたい裁判 申立人鈴木げんさん陳述書（call4 公開版）】

※call4 (<https://www.call4.jp/info.php?type=items&id=I0000075>) 公開用に適宜省略・修正をしています。

※再頒布はご遠慮下さい。リンクは自由にお貼りください。

できるような仕組み」に変えていくことにも力を入れています。

専門家としては、静岡大学の笹原恵教授や、聖隷浜松病院リプロダクションセンター長の今井伸医師、浜松市議会議員の鈴木めぐみ議員などが関わってくれています。

（３）パートナーとの暮らし

2017（平成29）年、共通の知人を介して今のパートナーである國井良子さん（以下、「良子ちゃん」と呼びます）と出会いました。僕は良子ちゃんに一目惚れをし、翌年の彼女の誕生日に花束を渡し「結婚を前提に付き合ってください」と申し込みました。良子ちゃんとお会った時にはすでに、ホルモン治療の効果で声も低く髭も生えており、男性的な筋肉質な身体になっていました。良子ちゃんは僕の戸籍が「女」であることを承知しながらも、僕のことを「男」と正しく認識し、交際の申込みを受け入れてくれました。

良子ちゃんは浜松市の市街地で働いているので、お互いに普段は別々に暮らしています。休日には、春野町の僕の自宅や山の中でのんびり一緒に過ごしたり、浜松市内外での「浜松TG研究会」の活動と一緒に取り組んだりしています。良子ちゃんは料理が上手で、僕の自宅で美味しいご飯やお菓子を作ってくれるので、僕はつついSNSで自慢してしまい、この申立てを担当してくれている弁護士からも「いつものろけている！」「また美味しそうな写真をアップしてる！」と文句を言われるほどです（添付④）。

料理は得意な良子ちゃんに全てお願いしていますが、それ以外の家事全般は仲良く分担してこなしています。

現在、僕の戸籍が女性のままなので、戸籍上は僕と良子ちゃんは女性同士の同性になってしまい、法律婚はできません。良子ちゃんは「いつ

【オペなしで！ 戸籍上も「俺」になりたい裁判 申立人鈴木げんさん陳述書（call4 公開版）】

※call4 (<https://www.call4.jp/info.php?type=items&id=I0000075>) 公開用に適宜省略・修正をしています。

※再頒布はご遠慮下さい。リンクは自由にお貼りください。

になったら結婚できるのかな」と言いながら、この申立てのことも応援してくれています。2020年4月1日、浜松市パートナーシップ宣誓制度が施行され、僕と良子ちゃんは静岡県内での宣誓カップル第一号となりました。次は、僕の戸籍が男性になった時に婚姻届を出し法律上も結婚をするのを楽しみにしています。

第3 生殖腺除去手術を希望しないこと

1 自分自身の思い

僕は、自分の戸籍や公的書類で「女性」と書かれているのを見ると「自分じゃないことを書かれている」と感じます。特に、「いつか自分が死んだ時の死亡診断書や死亡届に女と書かれるのは嫌だ。」「人生の最後の書類にまで、自分じゃない属性を書かれるのは嫌だ」と拒否感や不安を抱いています。

でも、今の特例法の下では、僕は戸籍上の表記を変えるためには卵巣摘出オペを受けなければいけません。もし仮に、今の僕に毎月生理が来ていて手術をしないと絶対に止められないのであれば、「手術したい」と考えただろうと思います。でも実際には、ホルモン治療のおかげで、もう生理はありません。そして自分自身の身体で最も強烈に違和感があったのは、胸の膨らみという外見に関することだったのですが、乳腺除去手術をして胸が平らになり、その違和感はなくなりました。さらに男性ホルモンのおかげで筋肉量が増え、男性的な体型になりました。こうした変化を経て、僕は今の自分の身体をこれ以上変化させる必要性は感じていません。そもそも卵巣を摘出する手術をしても、それにより外見が男性的に変化することはありません。なので、僕が僕らしい男の身体で生きていくために卵巣摘出手術は全く必要がないのです。

【オペなしで！ 戸籍上も「俺」になりたい裁判 申立人鈴木げんさん陳述書（call4 公開版）】

※call4 (<https://www.call4.jp/info.php?type=items&id=I0000075>) 公開用に適宜省略・修正をしています。

※再頒布はご遠慮下さい。リンクは自由にお貼りください。

必要性がないことのために、なぜ金銭的にも身体的にも負担の大きい手術を受けないといけないのか、納得ができません。職人として山の中で竹細工をつくる自営業の自分にとって、手術のために時間をつくり健康上のリスクを負うのは大きな負担になります。また、添付⑤の支出一覧のとおり、2015年の治療開始から去年2020年までの6年間の精神科の診察、ホルモン治療、胸オペ等の治療で総額200万円以上の費用を支出しています。ホルモン治療は今後も一生必要であり、その費用はかかり続けます。それに加えてさらに卵巣摘出手術のため100万円単位の支出をするのは、経済的な負担が大きすぎます。

僕一人の生きやすさだけを優先すればいいのなら、こうした負担を引き受け、卵巣摘出手術をして戸籍を男性に変える選択をしてもいいのかもしれません。でも僕は、一緒に活動する地元の仲間にも恵まれ、浜松市パートナーシップ宣誓制度の制定や、男女二元論とシスジェンダー中心主義に基づいた公立中学の制服を変える取り組みなど、性的マイノリティをはじめみんなにとって生きやすい社会にしていくために声を上げることで、制度を動かす経験をしてきました。だったら、自分の戸籍の問題でも、自分の身体を不必要に安易に変えるのではなく、法律の方を変えたいと考えました。

2 他のトランス当事者の実情

(1) 「手術して当たり前」と思い込んでいる当事者

特例法は成立から18年、施行から17年が経ち、若い世代のトランスジェンダーにとっては、幼い頃から存在している法律ということになります。若い世代の当事者たちは、僕の世代と比べると早くから性的マイノリティに関する情報に触れる機会が多くあり、小中学生の頃から自分がトランスジェンダーだと自覚し、戸籍とは逆の性別で生活をする子

【オペなしで！ 戸籍上も「俺」になりたい裁判 申立人鈴木げんさん陳述書（call4 公開版）】

※call4（<https://www.call4.jp/info.php?type=items&id=I0000075>）公開用に適宜省略・修正をしています。

※再頒布はご遠慮下さい。リンクは自由にお貼りください。

もいます。そういう子ども達の認識では、良くも悪くも「特例法は今の内容で存在していることが当たり前」の状態なので、「戸籍の性別は変えられないものだ」と絶望することはないけれど、「戸籍を変えるためには手術をしなくちゃいけない、それがトランスジェンダーの正しいあり方だ」と思い込んでいる子も少なくないです。

例えば「卵巣が自分の身体の中にあること自体が気持ち悪い、子どもを育てる臓器が自分の身体の中にあることや、女性ホルモンが出ていること自体が辛い」と感じている当事者にとっては生殖腺の除去手術ができることは絶対に必要なことです。しかし、卵巣や精巣などが自身の身体にあることを特段苦痛に思っていない当事者が、「戸籍を変えるため」という理由で手術を決断している現状を見ると、「正しい情報の元で複数の選択肢が提示され、安心安全にゆっくりと、将来を考えられる環境が必要だ」と強く思います。性別の違和感に苦しむ若い当事者にとって、就職活動前に戸籍の性別を変更することは念願であることが多く、お金の問題に加えて若いゆえの焦りや知識の乏しさから出る苦しみが重なります。また、複数の選択肢が提示されていないことは選択肢がないと同じことと思われ、「法律には従わなければいけない＝手術を選択することが正しいことだ」という前提をもつ若い当事者も多いと思います。

さらには、法律の中に手術要件があるため、手術や治療をしていない若い当事者が「まだ手術をしていないから／まだ戸籍を変えていないから、自分はだめだ」と自己否定的な感情になってしまったり、「あの人は手術をしていないから本物のトランスジェンダーじゃない」と否定的なまなざしを向けたり、向けられたりする姿も見かけます。本来性のあり方は多様で、ひとりひとり全く違うものです。性別に違和感を感じていても、ホルモン注射だけを望む人、胸オペは絶対必要だと思っている

【オペなしで！ 戸籍上も「俺」になりたい裁判 申立人鈴木げんさん陳述書（call4 公開版）】

※call4 (<https://www.call4.jp/info.php?type=items&id=I0000075>) 公開用に適宜省略・修正をしています。

※再頒布はご遠慮下さい。リンクは自由にお貼りください。

人、卵巣の摘出手術を望む人、順を追って複合的な治療を希望する人など、トランスジェンダーの中でも様々です。トランスジェンダー当事者が生きやすくなるために先人の努力で成立した特例法が、今では厳しい要件のために当事者を分断し、さらに生きにくさの一要因になっているようにも思えとても残念です。

この事件の申立て準備を知って、僕に初めて連絡をくれた当事者もいました。■ ■の地方に住む若いトランス男性でした。彼は、『仲間内では「卵巣摘出をすることは男として当然のこと。それで身体を壊して死んだとしても、それで本望」「男性ホルモンとか身体治療をしないことはおかしいこと、それは男ではない」「手術の傷は大きい方が男らしい」ということが言われている。特に20代のトランス男性コミュニティでは当たり前になっている。自分はおかしいと思っているけれども言えない。ただでさえ社会の中で少数者なのに、言ったらこのコミュニティの中でもいじめられる。臓器のあるなしなんて見た目ではわからないのに…』と電話で泣いていました。こういった価値観の中で苦しんでいる当事者は彼だけではありません。

（２）手術したくてもできない当事者

上記（１）とは逆で、「手術は嫌ではない」むしろ「積極的に手術を受けたい」と思っている当事者でも、経済的な負担や健康上のリスクをはじめ、様々な理由で手術が受けられず困っている人もいます。

そもそも、日本で性同一性障害の専門医制度がスタートしたのが2016年のことでまだ歴史が浅く、（精神科、婦人科、泌尿器科、形成外科を合わせても）専門医は全国に33人しかいません。（2021年9月の現在の数字です。GID学会HP参照）しかも、身体治療をスタートする前に「性同一性障害」の診断をもらう必要があり、そのための精

【オペなしで！ 戸籍上も「俺」になりたい裁判 申立人鈴木げんさん陳述書（call4 公開版）】

※call4 (<https://www.call4.jp/info.php?type=items&id=I0000075>) 公開用に適宜省略・修正をしています。

※再頒布はご遠慮下さい。リンクは自由にお貼りください。

神科領域の専門医がこれまた少なく、メンタルヘルス専門職の所属施設は全国に13箇所しかありません（G I D学会HP記載の最新（2015年2月24日現在）の計算です）。

そして、ホルモン治療や希望する各種手術のできる病院を分野ごと（泌尿器科、婦人科、形成外科など）に専門医を探し、それぞれに受診する必要があります。そのためそれぞれ専門医には患者が集中し、そもそも初診の予約が取れなかったり、自分の住まいから一番近い病院であっても新幹線で通院する必要があったり、継続して通院するためには莫大な費用と体力が必要になります。遠方でなおかつ交通アクセスの悪い病院に通うためには、日帰りでは通院できず前泊することになり、宿泊費にプラスして休日も必要になるという負担もあります。（僕の場合には山梨大学医学部附属病院などがその例です。）

そうすると、時間や休みがとれない人や生活に困窮している人は手術を望んでもできないということが起こってきます。

上述したとおり、僕の場合には、卵巣除去手術をしていなくても6年間の精神科の診察、ホルモン治療、胸オペと各種検査と交通費等で総額200万円以上の費用かかっています。僕は浜松市在住ですので、ホルモン治療や血液検査のできる病院が市内にありますし、病院近くの実家に宿泊することもできますが、希望する治療ができる病院が近くにならない人は、僕以上に交通費や宿泊費を支出しないと通院できないこともあるかと思います。

第4 戸籍や公的書類で「女性」と扱われることへの思い

繰り返しになりますが、日頃不安が強い懸念は、「いつか自分が死亡した時に死亡診断書や死亡届に女と書かれるのは嫌だ。」ということ

【オペなしで！ 戸籍上も「俺」になりたい裁判 申立人鈴木げんさん陳述書（call4 公開版）】

※call4（<https://www.call4.jp/info.php?type=items&id=I0000075>）公開用に適宜省略・修正をしています。

※再頒布はご遠慮下さい。リンクは自由にお貼りください。

です。死亡したときの書類で正しく男性として扱われるという、シスジェンダーにとってはいちいち考えもしないような当たり前の普通のことを僕も叶えたいし、そんなことに怯えずに毎日暮らしたいです。

日常生活で既に具体的な不利益として生じているものとして大きいことは、選挙の投票と住民票の性別欄とマイナンバーカード、そして良子ちゃんとの関係です。

まず、選挙の投票では、多くの自治体と同様、浜松市の投票所入場券には本人確認の情報として性別（浜松市の場合は男女別を数字で表しています）が記載されています。僕の場合、普段社会の中で男性として暮らしていて、初対面の人も外見から僕を「おじさん（男性）」と判断するのに、投票所入場券には「女性」を表す記号としての数字が書かれているのです。僕は、その投票所入場券にある情報を自分が住んでいる地域の人に見られることに耐えられず、投票日当日の自宅近くの投票所には行かず、自宅から車で1時間ほどの距離にある浜松市■■■区役所までわざわざ行き、期日前投票をしています。といっても、期日前投票のスタッフの方も、僕の外見と投票所入場券の性別記載が一致しないことで戸惑われるという状況は同じなので、期日前投票で区役所ならトラブルがないということでもないです。

僕の住んでいる地域の方は幸いにも、僕を男性と認識した上で「戸籍上は女性の記載になっていて、色々不便なことがあるようだ」と肯定的に受け止めてくれているので、もし僕が近所の投票所に投票に行っても、入場券の性別記載を見て何か差別的な扱いをされるということはないだろうと思います。それでも僕が地域の投票所に行けないのは、普段僕を男性として認識し人間関係を築いている人に「女性」という「本来の自分ではない登録上の性別表記」を見られることへの抵抗感と、それを拒

【オペなしで！ 戸籍上も「俺」になりたい裁判 申立人鈴木げんさん陳述書（call4 公開版）】

※call4（<https://www.call4.jp/info.php?type=items&id=I0000075>）公開用に適宜省略・修正をしています。

※再頒布はご遠慮下さい。リンクは自由にお貼りください。

絶したい気持ちがあるからです。

住民票については、一番最近車を購入した時に必要とされました。住民票には性別欄があり、それを自分自身で見ることがあまりに苦痛なので、性別表記を省くことができる「住民票記載事項証明書」で代用できるか先方に確認をし、住民票の代わりに提出しました。この住民票記載事項証明書自体も、事前に利用者側で雛形を用意しなくても住民票と同様に役所に行けばいつでも発行できる状況を作るために、行政側で雛形を用意してもらえる状況をつくるなど、僕たちが市の担当課と何度も交渉を重ね実現したことです。

マイナンバーカードにも性別欄があります。なので、僕は取得できていませんし取得するつもりもありません。今後、保険証や免許証との一体化が予定されているという報道を知って、恐怖を感じています。当事者の働きかけにより、免許証から性別欄がなくなり保険証では性別表記が裏書き（上述のとおり、表面には記載せず裏面に記載する）にできるなど、今現在すでに性別というトップシークレットな個人情報に対しての配慮がされているのに。「今後また雑な扱いに逆戻りですか？いい加減にしてください。」と言いたいです。

もう一つは、良子ちゃんとの結婚のことです。僕は男性として生きていて、女性である良子ちゃんのが好きです。良子ちゃんは女性として生きていて、男性である僕のことを好きだと言ってくれています。ですから僕と良子ちゃんは、性自認も生活実態も異性愛者のカップルです。同性愛者のカップルの婚姻が認められないことと同様に、本来平等なはずの婚姻という権利が認められず、個人の属性によって幸せの形が限定されることは不平等で、本当におかしいことだと思います。

【オペなしで！ 戸籍上も「俺」になりたい裁判 申立人鈴木げんさん陳述書（call4 公開版）】

※call4 (<https://www.call4.jp/info.php?type=items&id=I0000075>) 公開用に適宜省略・修正をしています。

※再頒布はご遠慮下さい。リンクは自由にお貼りください。

第5 本手続き申立てへの思い

ここまでの僕の46年間の人生を改めて振り返り、はっきりしたことがあります。性自認が男性で、外見も男性、地域からも男性として認識され、男性としての生活実態もある僕の戸籍が、今日「男」に変わっても誰も困る人はいないということです。むしろ僕の人生はスムーズになり、格段に生きやすくなり、周囲の混乱も解消されます。

でもこれは、僕がなにか特別な権利を手に入れることではありません。多くの人たちが普通に持っている権利であり、普通に行っている日常です。自分が実感し生活しているジェンダーで社会から個人として認められ、それを前提として周囲の人たちからも認識されるということです。自分の知らないところでいつ表に出てきて爆発するか分からないような、自分のものではない性別表記に怯えて生活をしなくても済むということです。好きな相手と結婚し幸せに生きられるということです。

僕と同じように、性別の違和感からくる複雑な経験を持つ若者や子ども達にとっても、これはとても必要なことです。本来、自分の人生にとって大切なことは全て自分で決められるべきことです。社会から自身のアイデンティティを正しく承認されることと引き換えに「手術で内蔵を取り出せ」なんて言われて大丈夫な人はいません。

性的マイノリティの若者や子ども達を含む、全ての人の人生が社会から尊重され、安心して生きられる社会になりますように。お互いの選択と幸せを喜ぶことができる優しい社会になりますように。どうぞ宜しくお願いします。

以上

【オペなしで！ 戸籍上も「俺」になりたい裁判 申立人鈴木げんさん陳述書（call4 公開版）】

※call4（<https://www.call4.jp/info.php?type=items&id=I0000075>）公開用に適宜省略・修正をしています。

※再頒布はご遠慮下さい。リンクは自由にお貼りください。

※この陳述書は、申立時に提出したものを call4 公開用に適宜省略修正を施したものです。

再頒布はご遠慮下さい。リンクはご自由に貼って頂けますので、事件のご理解や支援にお役立てください。